

苦境の経験をも芸に活かす

昨年7～9月にかけて、上方落語協会所属の若手噺家37人(2003～17年入門)による「第7回上方落語若手噺家グランプリ2021」(アーツサポート関西助成)*が開催され、桂小鯛さんが優勝、桂二葉さんが準優勝に輝いた。また、11月には二人揃ってNHK新人落語大賞の本選に出場し、二葉さんが大賞を受賞。2年におよぶコロナ禍で落語界が苦境にあるなか、それをも芸に活かす心意気で乗り越え、手にした栄冠だった。

*上方落語の伝統継承と若手噺家の育成を目的として、アート引越センター株式会社・寺田千代乃名誉会長の寄付をもとに、2015年から10年間(10回)開催予定。



どうしても獲りたかった

「グランプリを受賞して何より嬉しかったのは、師匠や師匠の奥さん、お兄さん(先輩)方、関係者の方々、親兄弟に喜んでもらったこと」という桂小鯛さん。上方落語若手噺家グランプリは若手が憧れる大きなタイトルだけに、どうしても獲りたかった。決勝戦の演目は、落語好きな夫婦の会話を描いた創作『落語夫婦』。20作ほど作った中の一つで、当初は審査員好みや決勝戦にふさわしいネタにしようかと色々考えたが、目の前のお客様に楽しんでもらうのが一番という思いで決めた。「グランプリにはこれまで5回出場し、決勝進出は3回目。そうした慣れもあって、今までで一番落ち着いてできました。師匠(桂塩鯛さん)は弟子に言葉をかけることが少ないんですが、このときばかりは『よう頑張ったなあ』と褒めてもらいました」と笑顔で語る。

入門してしばらくは社会人としても日が浅く、師匠から叱られてばかりだった。例えば師匠の奥さんの手料理をご馳走になっていると、「黙って食べるな。美味しいですねとか、どうやって作るんですかとか、何かいうことがあるやろ」と注意される。「普段から人を喜ばせる気持ちがないと落語はできないという教えです」と小鯛さん。とはいえ師匠の塩鯛さんは、小鯛さんがきつく叱られて凹んでいると、「俺もいまだにざこばさん(塩鯛さんの師匠の桂ざこばさん)に叱られるけどな」とフォローしてくれる優しさがあるという。

桂米朝一門に脈々と伝えられている教えに、「結局は人間性」というのがある。人への思いやりや優しさがないと舞台の上で言葉の端々にそれが表れるし、お客様も感じとる。小鯛さんは、今それを強く感じていると話す。

コロナ禍をマイナスにしない

数年前、小鯛さんは師匠から「ベンツを買え」といわれた。理由を聞くと「お前みたいな風采の男がベンツから出てきたらおもしろいな」と。最初は乗り気ではなかったが、買ったことを話題にしてもらったり、『ベンツ購入記念落語会』を開いてもらったりした。「師匠も若い頃にBMWを買って発奮材料にしたそうで、私もベンツが結構武器になりました」と笑う。

昨年の新型コロナ緊急事態宣言中は、全く仕事がなくなった。そこで、韓流ドラマや映画を観て新作のアイデアにしたり、SNSを始めたり、絵を描いたり、料理をしたりと、今までしなかったことを始めた。「リモート落語会に参加し



かつら こだい
桂 小鯛さん

1984年岡山県倉敷市出身。県立倉敷古城池高校卒業後、芸人を志す。2007年6月桂都丸(現・四代目桂塩鯛)に入門。同年11月桂とま都の芸名で北座染屋町寄席(京都市)にて初舞台。2010年小鯛(二代目)に改名。2014年第9回繁昌亭大賞輝き賞受賞。令和3年度NHK新人落語大賞の決勝にも進出。芸歴15年、米朝事務所所属。

て自宅からお客様に落語を配信しました。噺家は落語の稽古をしているだけで面白くなれるわけではありません。沈んだ経験も活かせると思うので、コロナ禍が全てマイナスだとは感じていません」と話す。

何事もコツコツとするのが好きな小鯛さんは、今後も噺家としてコツコツと精進していくことに変わりはないという。今後の目標を聞くと、「古典でも新作でも、お客様から『この噺は小鯛から聞くのが一番好き』といってもらえる演目を一つでも増やすこと」と、表情を引き締めた。

悔しい思い

古典落語はもともと男性が演じる前提で作られているため、女性がやると違和感があって笑えないことがある。桂二葉さんも先輩の女性噺家たちと同じく、「女に落語はできない」「高座返し(座布団や名ピラを返す仕事)だけやっていればいい」などといわれ続けて悔しい思いをした。それを発奮材料にしてきただけに、受賞の喜びもひとしおだ。とりわけ50年の歴史があるNHK新人落語大賞を女性初で受賞したことは嬉しく、記者から感想を聞かれて「今までやいやい言うてきたジジイども見たか!っていう気持ち」と、つい日頃の鬱憤が口をついて出た。

学生時代から熱心に寄席通いを続け、将来は噺家になるつもりでいた。女性が落語をするのは難しいとわかっていたが、自分の言葉で自然体で喋る師匠(桂米二さん)に魅力を感じ、門を叩いた。実際、桂米二さんは、「女性に落語は難しいなあ」と思いながらも、どうしたらよくなるか一緒に考えて稽古をつけてくれたそうだ。「すっごく覚えの悪い私を見捨てず、とことん丁寧に教えてくださいました。そのおかげで今日の私があると本当に感謝しています。落語以外ではめっちゃくちゃ叱られましたけどね」という。入門11年目。男性が自分の個性を活かして演じるのと同じように、女性として自分の個性を活かして受賞できたことが嬉しく、「やっと男性と同じ位置に立てた喜びがある」と微笑む。

度胸試し

二葉さんは昨年、コロナ禍で3か月ぐらい人前で落語ができず、お客様の前に出るのが怖くなった。そこで度胸試しにと、「天満橋の滝川公園で公開稽古をします」とTwitterで発信したら、40~50人ほど集まった。「久しぶりに人前で落語をしたので、じんましんが出ました。落語をするのがこんなにストレスやったとは…」と明るく笑う。

自身も新型コロナに感染し、昨夏10日間ほど自宅療養をした。「買ってきたものの包装は必ず除菌シートで拭くし、ラジオ局ではアクリル板があってもマスクをするし、すごく気をつけていたのに」と悔しがる。今まで命に関わるような大病をしたことがない二葉さん。「不謹慎な言い方かもしれませんが、こんな苦しい経験をしたことで、良い噺家に一步近づくんやないかと病の床で思っていました」と振り返る。

小鯛さんがベントを購入した話を聞いて、「私も高い買い物をして、『がんばれよ』って自分の尻を叩くのが好き」という。NHK新人落語大賞の出場前に賞金額と同じ50万円分の着物などを買い、絶対に大賞を獲るぞと自分にいい聞

かせたこともあった。今後の目標は、「お! 繁昌亭に二葉出てるやん! 観にいこ!」となってもらえる噺家になること。昨年9月に初の独演会(ABCホール/大阪市)をした二葉さんは、今回の受賞をバネに全国で独演会ができればと夢を膨らませる。「お兄さん(小鯛さん)みたいに新作を作れないので、当分は古典でいきます。古典落語の登場人物は、どんな人でもその人なりに楽しく生きていて、困っていたらお互い助け合う。そんな優しい世界観が好き」という。

コロナ禍を経験し、さらに高みを目指す二人の言葉に、噺家としての強い情熱を感じた。

2021年12月24日/天満天神繁昌亭にて
(ライター 三上祥弘)



かつら によ 桂 二葉さん

1986年大阪市出身。京都橋大学文学部卒業後、スーパーマーケット社員を経て2011年3月桂米二に入門。同年9月梅田太融寺にて初舞台。令和3年度NHK新人落語大賞では出場者107名の中から大賞を受賞し、上方落語若手噺家グランプリと共に大会史上初の女性受賞者となった。NHK新人落語大賞のネタは『天狗さし』。トレードマークのマッシュルームヘアーは自分でカットする。芸歴11年、米朝事務所所属。